
ジュラノイズ

洸淋寺 凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジュラノイズ

【Nコード】

N9751C

【作者名】

洸淋寺 凧

【あらすじ】

とある朝、仲のよい小学校六年生二人組み「千野雷也」と「創野巧」は不思議な噂を耳にする。「ねえねえ知っている？なんかだんだん荒野にね！・・・ミステリーサークルが出たらしいよ！」謎の地、だんだん荒野で雷也は父親と姉を失っている。嫌な予感がしながらも興味本意で向かった二人を待ち受けていたものとは！？

第1章 だんだん荒野

「ねえねえ知っている？なんかだんだん荒野にね！・・・ミステリ
ーサークルが出たらしいよ！」

——だ・・・だんだん荒野だって！

僕は創野巧そうのたくみの言葉に驚いた。創野巧は一番の友達だ。

話はそれるが、僕、千野雷也せんのらいや。千葉県市川市にある小学校に通う
六年生で、一二歳！性別は男だ。

僕には父と兄弟がない。それは、昔、僕には一二歳年上の姉がい
たらしい。しかし、その姉は僕が生まれるのとちょうど同じ瞬間に、
だんだん荒野の前の通り道で、大型トラックにひかれ、死んでしま
った。

そして僕の父は、姉の死んだ日から六年たった日、つまり僕の六歳
の誕生日に、父もまた、だんだん荒野で死んだ・・・と、思う。何
故思うのかというと、誰も父の死体を見ることはなかった。と、
いうより、消えたのだ。父は。跡形もなく。

平成十二年八月九日 午後七時五十四分。・・・後五分・・・、僕
は父の帰りを待っていた。僕の誕生日プレゼント一緒に帰ってくる
父を。

トウルルルルル

電話が鳴った。

「はい、千野です。」

僕の母は、そう言って黙り込んでしまった。それを見ていたもう時
期六歳になる僕は何だか、嫌な予感がした。そして四分後、母は父
に緊急指令が来て帰れなくなった。と、いうことを僕に伝えたその
時・・・

ドーン

もの凄い雷鳴が鳴り響いた。

三日後、分かったのだが、その雷はだんだん荒野に落ちたそうだと。そしてその時、父も、緊急指令で、だんだん荒野に行っていたらしい。それまで、だんだん荒野は、草ぼうぼうだったのに、今では・・・草のかけら一つもない。みんな雷にやられたのだ。草も、土も、・・・僕の・・・父も。

話は戻る・・・僕の父も、姉も、みんなだんだん荒野付近で失った。だから僕は、だんだん荒野と、言う言葉には敏感だ。だから僕は巧に聞いてみた。

「ミステリーサークルって・・・どんなやつ？」

「どんなのかは知らないさ！ただの噂だし！」

——本当に噂ただけだろうか・・・何か悪いことの前ぶれでないだろうか

雷也は、この不安を巧に伝えた。

「な～に心配するこた～ないさ！もし心配なら明日の昼にでも見に行くか？」

「ひ・・・昼って学校は！」

「は？明日は八月六日だろ！この学校が建った日だから休みだろ！」巧はさりとて言う、まだ不安そうな僕をちらりと横目で見てさらに続けた。

「ま、嫌ならいいけど？」

そしてぼくは、首を横に振り、

「明日・・・行こう。」

と、なるべく巧に聞こえないように、小さくつぶやいた。

次の日、僕達はお昼ご飯を食べてから、二人で自転車に乗って、だんだん荒野へ向かった。だんだん荒野に着くまで僕達はこの前買ったゲームの話をしていた。

「ねえ、たっ君！最初のボス倒した？」

「え！まだまだ！俺はゲーム苦手だからまだ・・・」

僕は創野巧のことを、「たっ君」と、君付けで呼ぶ。それに比べ、

たっ君はぼくのことを「雷也」と、呼び捨てにする。たっ君はいつも冷静だ。いつも僕と二人になった時くらいしかたくさんしゃべらない。学校の中じゃあ先生にさされた時くらいしかしゃべらない。もちろん誰かに話しかけられれば合鍵を打つくらいで、深入りはしない。けど、僕には腹を割って話してくれる。けど今は学校や、知らない人の前でないのに、たっ君はローテンションだ。今日のたっ君は、いつもより顔色が悪い。僕はこの場の雰囲気を逃れるため、言った。

「あのね！最初のボスってね！すううんすごいデブっちゃなんだっよ！」

「ふん」

「や・・・ヤバイ！しらけちゃった！な・・・なら！」

「ね・・・ねえ、たっ君！今僕ね、実は、ジュース持ってきてんだ！たっ君の分も持ってきてあるから飲む？」

「・・・いい・・・」

「——こうなったら

「なにさ、なにさ！さっきから黙っちゃって！たっ君らしくないじゃないか！悩みごとがあるのだったらさ、僕に相談してよ！友達でしょ！」

最後のほうの声は、とても小さくなってしまったが、たっ君はニコリと笑いこう言った。

「分かりやした雷也の兄貴！けど、覚悟して聞いて下せえよ！」

これは、今、僕達がやっているゲーム、「ジュラノイズ2」と、いうゲーム出でてくる、おとも役のジュネラという人の、しゃべり方だ！そして僕は、

「分かったよたくっち！かくごしてやるだぜ！」

主人公の真似だ！

「実は・・・兄貴・・・あっし、外国に・・・引っ越すことになったんでやす」

ジュネラ口調のまま、たっ君は言った。

——そんな・・・そんな！嘘だろ！

たっ君の言葉が信じれず、僕は、わざとふざけて、

「もうたっちゃん！そんな嘘は、だめよ」

などといってしまった。それには、いくら冷静なたっ君でもカチンときたようだ！

「嘘な分けないだろ！！俺は・・・俺は・・・残りわずかな、日をお前と一緒に楽しみたいんだよお！」

たっ君の長い前髪からしずくがたれる。

たっ君は泣いてるんだ！悲しいから泣いてるんだ！・・・そんなの当たり前のことなのに、僕は、なんだかそれが今始めて実感したように思えた。

「たっ君・・・ほら！もうすぐだんだん荒野だよ！早く行こう！早くしないとおいでっちゃうよ！」

「お・・・おう」

たっ君は涙をゴシゴシと拭いて、また自転車をこぎ始めた。すぐそこにある、そしてこれから最高の思い出となる、だんだん荒野へと。

第2章 運命の書

だんだん荒野へ続く細い道のあるお寺に、僕達は自転車を止めて、持ってきたポシェットから、おさい銭を取り出した。そしてそれをおさい銭箱に入れ、お参りをした。

・・・二人は、お参りをした後、だんだん荒野へ向かったのだ。そこには、色が、どんどん変わっていくものがあったのだ。

「おそらく・・・これがミステリーサークルなのだろうな！」

「あれ！何かうまつてる！」

「ほ・・・本当だ！」

雷也は、自分の足元の近くに、なにかが埋まつてるのに気付いた。

「よし！ほってやる！」

「や・・・やめようよ！たっ君！」

たっ君はどんどん手で穴を掘っている。

「運命の書？」

穴を掘ってでてきたのは、なんと小さな単庫本だった。

・・・しかし中身を読んでもみると、なんと、「八月九日、運命の間は開く。」としか書いてないのだ。

八月八日、朝の五時から僕はゲームをした。もちろん「ジュライズ2」だ。

初めの町の、ボスと戦いに言った時、玄関のチャイムが鳴った。

「や！」

たっ君だ。

そしてたっ君も鞆から、「ジュライズ2」を出した。

始まりの音楽になる。少しテンポが速い音楽だ。と、思っている
と・・・

「おい！何ボケツとしてんの！ほら！早く交換しよう！」
こうかん

そうだ、僕は初めの町の雑魚キャラも倒せないたっ君に、レベル

が上がるまでガンビヤというまあ最初の町ではまあまあ使えるくらいの強さのモンスターを貸してあげる約束をしていたのだ。

言い忘れていたが、このゲームは、初めは主人公と、変な口癖のあるジュネラだけである。まあ、ストーリーがある程度進むと、ある村の長とか言う魔導士らしい人がゲッカーシユープとか言う名前の腕輪をくれるんだ。そして、バトル中の選択肢画面で、「チームスカウト」っていう所を押すと、主人公たちが光を帯びるんだ。そしてから、モンスターに攻撃ってコマンドをやれば、敵に攻撃をして、与えたダメージ分だけ、相手を仲間にできる確立が上がる。・・・分かっていているとは、思うけど、初めの「チームスカウト」で主人公たちは、一ターン使うわけだから、まだレベルが低いと、敵を仲間にさせる前に、残念ながら敵にやられてしまうわけだ。ま、僕はもう、最高が九十九Lv中、二十四Lvだけど、初めの町・・・デイカと、というステージの最低レベルクリアは、四Lvだけだね！でもたっ君は、まだ一Lvだけだね！・・・ここまで言っというて分からない人はいないだろうけど、このゲームRPGだからね！ロール・プレイング・ゲームと、いうのは置いといて、とにかくたっ君は弱いだってHPが四しかない「カル」という無茶苦茶弱い敵一匹も倒せないんだから。前、僕がたっ君に、「頭がいいんだから、いい戦略が考えられそうなんだけど・・・」って言ったら、「勉強とゲームは、頭の使い場所が違うんだよ！」って言われちゃった。

ガンビヤの交換が終わわり、五時になったので、たっ君は帰った。夜、いきなり電話が、ほえるようにワンワン鳴った。たっ君からだ。

「雷也！明日だんだん荒野に行こうぜ！」

「え！学校は？まさか今度も休みだって言うの？」

「いや！」

「じゃあサボるの？」

「んなわけあるか！学校の後だよ！」

「あっ・・・そうか！・・・でもそれなら学校で言えばいいのに。」

「それが・・・俺、明日学校行かないんだ。」

「え！何で！」

「うちの母ちゃんせっかちだからさ！イギリスに行くの、まだ四月ちよつとあるっていうのに、もう引越し準備始めちゃってさ！忙しいから俺に手伝えて・・・」

「イギリスに・・・行くんだ。」

「そ！あれ？まだ話してなかったっけ？ま、そうゆうことで明日は学校行かないから！じゃあね！」

ツーツーツ・・・初めはワンワン鳴いていた電話が、寂しそうに鳴く。

――あと・・・四カ月ちよつと・・・か。

第3章 旅人

学校が終わると、急いで家に帰り、運命の書を持ち、たっ君の家に向かった。

「たっくん！」

僕はたっ君を呼んだ。

すると・・・後ろにニッと笑った、たっ君がいた。

「さ、行こうか！」

僕らの旅は、始まった。

また、僕らはだんだん荒野へと向かう。

「ミ・・・ミスでリーサークルがない！」

だんだん荒野に着いた僕らは、まっすぐミステリーサークルへと向かった。しかし・・・ミステリーサークルが跡形もなく消えていたのだ。

すると・・・目の前に大きな穴が開いていたのだ。

それを見ていると、やがて、運命の書が温かくなってきた。

僕が運命の書を開くと、なんと、前まであった言葉に続き、新たな言葉が出てきたのだ。

「汝らが善ならば、その穴に入るべし」

後ろでそうたっ君がつぶやいた。

「よし、行こう！」僕は威勢良く歩き出した。

「待て雷也！よく考え・・・」と、言い終わらないうちに、僕達は何かに押され、穴の中に入ってしまった。

どんどん落ちてゆく・・・すると、また運命の書が温かくなった。なんだろう！と、思って運命の書を見ると「一度行こうと思ったのだから、もうひけない」と、あったのだ。

明かりが見えてきた。・・・え？何で暗いのに運命の所の文字が読めたかって？それは運命の書の文字が暗闇だと光るから！でした。

緑の生い茂った木々の間に、一軒の小屋。

僕たちは暗闇から解放され、光を得た僕らは、まぶしさのあまり気絶した。

・・・気が付くと僕はベッドで寝ていた。

あれ？ たっ君は？

僕はむくりと起き上がった。

「お！ 目覚めたか！ あ・・・大丈夫！ お連れさんなら外にいるよ！」
ゲッカーシュープをくれた魔導士のような服を着た人はそう言う
と消えてしまった。

外に出てみると、たっ君と、あの人がいた。

「おう！ もう大丈夫か？」

「よかった。たっ君が・・・」

「たっ君ではない！ もうお前らのコードネームは、ここではライヤ
と、タクミだ！」

あの人がかい声で言った。

「そうだ。俺はタクミ。なあライヤ！ お前、どうするわけ？ 母さん
たちきつと心配するだろう

な。」

そうだ！ 何故だかちよつとの間だったけど、母さんのことすっかり忘れていた！

「心配ご無用！」

あの方はそう言うと、また消えた。

二・三分後、またあの方が戻ってきた。

「お前たちは今からこの世界を旅することになる。しかし、家のこ
とが心配！ だろ！」

「は・・・い」

「ふふふそんなお前らには・・・じゃじゃ〜ん」
そう言ってあの方は手鏡サイズの鏡を出した。

「これは帰館の鏡だ！ と・・・その前に自己紹介を・・・私の名前

はナイック。職業は魔導師！しかも、もうインストラクター魔導師資格を取ったから、インストラクター魔導師とでも言うべきものだろう。自己紹介はこのくらいにして、帰還の鏡の説明をしよう！帰館の鏡とは、いくらお前らが遠くにいても、仲間に魔導師がいればこの鏡に向かって、『ジェノキル・サイコ・ア・リバーズ』と、唱えるだけで、いつでもこの場所に戻ってこられる！そして戻りの穴に飛び込めば、元の世界に戻れる。しかし！この旅は途中で止めることは出来ない。何故なら、お前らの魂の一部がこの世界に残っているからだ。それに、最初のほうは、遠出をしないほうがよいぞ！・何故なら、帰館の鏡を使えるのは、魔導師、又は魔女だけだから！だからあまり遠出をすると、まだ魔導師いないあんたたちは帰りが遅くなって家の人が心配するよ」

「やっぱり、ここにいた分、時間は動いてるんだ・・・」

「え！・・・ああそうだった！これを言い忘れていた。あのね、ここの時間はあんたたちの世界では動いてないよ・・・ただし、二十四時間はね！ここであんたたちが二十四時間過すと、あんたたちの世界の時間も動き出します。しかも、この世界での時間の五倍の早さでね！だから、絶対二十四時間内には必ず元の世界に戻ってくださいね！・・・こちらの世界はあなたたちがあちらの世界にいる時は二十四時間以上経っても動きませんからご安心を！」

「でも、歳をとるスピードとか、ここでの疲れ具合とかetc・・・はどうするの？」

「その所は大丈夫！こちらの世界とあちらの世界をつなぐ戻りの穴で、疲労もこちらの世界で取った年も全てリセットされるので・・・」

「じゃあ時間が遅れた場合は？」

「その場合はその遅れた分だけ年をとります」

「僕達の世界からこっちに戻ってきた時は？」

「その場合は前の歳の所からスタートします」

何故かさつきからタクミは遠くを見つめていた。

「ねえたっ君！・・・じゃあなくて、タクミ！」

何だか呼びづらい。

「・・・あ！何、ライヤ」

普段通りの呼び方が出来て楽だね・・・

「あ・・・あのく何さつきからボケッとしてんの？」

さつきまで青く澄んでいた。空がもう真っ赤だ！

「さつきナイツとかいうオッサンが魔導士が必要とか言ってたろ

！それ、俺がやってみようかなって・・・」

今、僕はナイツさんの小屋・・・僕が気絶して寝ていた家にいる。

「たのむ、俺に魔導士の称号を・・・魔導士の力を与えてくれ！」

「何故？」

「だって・・・俺はここにいつ・・・ライヤの父さんがなんだか居るような気がするんだ。だから・・・もし可能性があるなら、早く見つけてやりたいんだ！」

一瞬、ナイツさんの清んだ瞳に汚れが生じた。

「・・・たしかに・・・私の師匠は六年前、ここに一人の男が来たと言っていましたそれがライヤくんの父親だという確立は・・・」

「いや、さつき六年前って言ったよな！なら、ライヤの父さんだ。

九十%くらいはな！」

「そんな理由で？まあいいですけど、しかし魔導士になる素質がないと・・・ま、いいでしょう。測定しますから待っていてくださいね！」

そう言うと、ナイツさんは隣の部屋へ入っていった。

十分くらいすると、なぜか上からニカッと笑ったライオンの銅像が落ちてきたので僕はとっさによけた。

「ああすまない！この銅像重いから運べないんだよね！」

上からナイツさんが言った。

それして降りるとライオンの銅像に座った。

第4章 素質

「さ、こいつの中に入れ」

ナイックさんがライオンの銅像の口をガバツとあけた。

「はい、分かりました」

タクミがそう言うといきなりライオンの銅像が襲い掛かってきた。

「たっ君！」

「タクミだ！」

とっさにナイックさんが訂正した。

「大丈夫、タクミは死なん。」

三・四分がたつと、だんだん僕は中の様子が気になってきた。

「ね・・・ねえ、中の様子って見られないの？」

「見えるよ！口から」

口のほうに周ってみると、タクミが映っていた。なんだかタクミは何かと戦っているようだった。

画面が切り替わりカメラがタクミを正面から映した。そのとき、一瞬だったけれどはっきりと、タクミが戦っている相手の姿が見えた。タクミは、あのライオンの銅像と戦っていたのだ。けど、この僕の真正面にいる（ある？）銅像の、五倍・・・いや、八倍の大きさはあるだろう。

十分くらいそわそわしながら見ているといきなり映像が消えてしまった。

「試練終了だ」

「え？なんで？まだ倒してないよ」

「あのままやれば、タクミは死ぬぞ！」

「て、ことは試練失敗？」

「いや、試練、『成功』だ！」

「え？」

「タクミには、すごい素質がある。だってあの銅像を素手で倒すに

は、最低五年は、修行をする必要があるからね！」

ご、五年って・・・

しばらくしてタクミが出てきた。

「あれ？もうおしまい？」

「合格だ。お前ならすぐに帰館の鏡をマスターすることが出来るだろう！」

それからタクミの魔導士修行が始まった。・・・のかな？

「よし！このカップラーメンを・・・」

ジョー・・・漫画ならこんな効果音が出るだろう。とでもいうように、見る見るうちにカップラーメンがこぼれていく。

「さ、このカップラーメンを気合で食べろ！」

無理！腹壊す！

僕がそんなことを思っていると、タクミは手でカップラーメンをヒョイと拾い上げ、ぱくりと食べた。

「・・・合格！これでお前は魔導士十四級のうちの十級を合格だよ！ま、これが最初のテストだったけど・・・タクミ、君は魔法の才能があったから十級昇格のテストからだったけど。ま、あと一級上の九級に昇格すれば、帰館の鏡を扱えるようになるよ！でも昇格テストは一日一回しか受けられないから明日またここに来てね！ま、あの穴を使えばここに来られるけど、運命の書を手に取りながらこの世界のことを創造すれば、運命の書を使ってもこられるからね！あと、最初に言い忘れていたけど君達の世界からここには明日の午後三時四十分だからだ！」

「あそ！じゃ！」

「あ、それと、運命の書から来る時は・・・え！もういないし！」

第5章 ジュラモード

次の日、学校が終わった後、すぐに僕はたっ君の家に向かった。たっ君の家に上がると、僕は運命の書を取り、あの世界をイメージした。

あたりがいきなり真っ暗になった。

僕らが目を開くと、そこには町があった。

「あっ！やっぱここにいましたか！」

ナイックさんがかけよってきた。

「あのーここはどこでしょうか？」

「あ・・・ここ！ここはジュラモリアウンという町です！」

偶然だろうけど、この町の地名は、僕達の持っている「ジュラノイズ2」にも出てくる地名だ。

このことをタクミに言うのと、「なにそれ？」って言われた。まだタクミはここまで進んでいないのだ。

「もう！君達ったら！人の話は最後まで聞かないと！運命の書でこの世界来ると、適当な場所に出ちゃうのですよ！タクミを魔導士十級にしておいて良かったー」

「何で？」

「え！だって魔導士十級になるとやっとな魔導士クラブの魔導士帳に名前が載るようになってその名前のあるところにある魔法をかけると今その魔導士の居場所がパツ！と、頭の中に浮かぶのだ。そして、頭に浮かんだ君・・・そう、魔導士タクミの所へと向かったわけ！」

「で、その魔導士帳っていうのは、どこに置いてあるの？なんか役に立ちそうだから」

「あゝ無理無理！君程度のひよっこにはとうてい扱うことの出来ない代物だよ！なにせ魔導士五段にならないとその呪文を受け入れる要量が出来ないからねゝ」

「要量？」

「そう、魔導士が魔法を受け入れるために必要な要量。魔導士の素質を持つ者にはみんな要量があるのだ。最初はわずかしかないけど、どんどん昇格していくうちにその要量がだんだん増えていくんだ。

ま、最初のうちから魔導士帳を扱えるほどの要領を持つ超人がいるがそんなこと今は関係ないか！で、魔導士は昇格テストに合格するたびにそれなりの魔法を少なければ二択、多ければ五択位の魔法リストから選ぶことが出来るのだ！しかし無理をして要量の少ない時から強い魔法を受け入れれば・・・『消滅する』・・・ま、運がよければ受け入れることが出来るかもしれないが、一～二回くらい使うとまた、『消滅する』・・・しかし超強運の持ち主がいたのなら・・・消滅せずに・・・魔導士としての力を失うくらいで助かるかもしれない。ま、しないに越したことはないけどな！」

「ふーん！でもすごいじゃんナイックのオッサン！オッサンもまだ魔導士になって数ヶ月なんですよ！なのにもう魔導士帳が使えるんだあゝ」

「あ・・・いやいや！まだそんなに強くないよ！だって魔導士初段だもの！それでやっといんストラクター魔導士検定二級に合格したんだ！へへへ！」（ちよつと自慢）

「二級になるとどうかするの？」

「もちろん！インストラクター魔導士になれるのだよ！」

「いんぷつとらくたー？」

「インストラクター！」

きっぱりとタクミが訂正した。

「で、そのインストラクター魔導士って？」

「今僕が君達にやっているように旅仕度を手伝うのさ！ま、ふつうは魔導士になんかしないのだけど・・・ね！」

「ま、いいや！じゃあ移動魔法テレポルトで僕の小屋に戻りますから！・・・いきますよ！みんな僕のことを頭の中に思い描いてください！・・・では！・・・亜空に導かれ、汝ら、シルクの道に乗り、今、・・・レイチェロード！」

まばゆい光に僕達は包まれた。

目を開けるとそこはナイックさんの小屋の前だった。

「さあまずはタクミの魔法を決めましょう！」

「で、何があんの？」

「えータクミは魔導士十一級だから・・・えーメモ帳メモ帳・・・あ！あった！・・・えーつとですねー二つ・・・かな？うん！そう！ぜーったいそう！」

「あ・・・そう・・・だから何があるのさ！」

「これです！」

ナイックさんはそう言うと言コンみたいな物を取り出した。しばらくするとタクミがナイックさんに何かを耳打ちした。

「ねえタクミ！何にしたの？」

「な〜いしょ！」

「さ、次はライヤ、君の番です！」

「え？僕は何になるの！」

「君は何もなしですよ！今は！まあどうしても言うのなら、名前だけでも付けてあげましょうか？」

「な・・・何もなしって！さっき君の番って言ったじゃない！」

「言いましたよ！けど、君の職まで決めるとは、言っていないせん。僕はただ君の旅支度を手伝うだけですう〜」

「は・・・はあ」

「さっ！旅支度、旅支度〜」

旅支度を終え、僕達はナイックさんの小屋を後にした。もちろん、ナイックさんをおいて・・・。

目指すところは、特になく・・・。

「で、どこ行くの？」

「まずはとにかく町を探そうよ！」

「ねえタクミ・・・気付いたんだけどさあ・・・なんかここ、見たことない？」

空がオレンジ色の世界に変わった頃、穴に戻ると、ナイックさん

が笑顔で迎えていた。

「えーっと、タクミ、ライヤ、お帰り！君達は今からもとの世界に一時的に戻るわけだけど、明日また、タクミの魔導士昇格テストの十一、十級を受けてもらおうよ！」

「え、一日一回しか受けられないんじゃないの？」

「いや、多分今日のやつが受けられるとかだろう・・・？」

「ぶっぶーXXXXXXXちっがいまーす！タクミが二回受けられるのは、ゼイノリング・ギャリットスクラム元帥のお許しが出たからでーす！」

「ゼリーとギャンブルスクリーム？」

「ま、別に名前なんか覚えなくてもいいけど、ゼイノリング・ギャリットスクラム元帥であって、けっしてゼリーやギャンブルじゃないよ！」

そしてタクミのテストが始まった。

タクミは二つの昇格テストを意図も簡単にこなした。

「で、次は何の魔法が覚えられるの？」

「えーっと、明日は帰館の鏡だとして、今日は・・・二個だね！」

「で、何が有るのよ？」

タクミとナイックさんは何か話し始めた。

「瓦斯Yラオ尾上フィ卯dmbhルエとtwくえhウエ9卯！」

「？・・・」

「f m kたあ r t流 y y s d n ヴォ d 俱 U；フオ s p @ オッ貞枝有るとちよ v 話亜弔意こ女陰！」

「え？」

「多分この人とは言葉が違うんだろう！」

「ひ・・・人なの？」

僕らはタクミがナイックさんと魔法を決めた後、僕らは昨日の続きを始めた。

すると、いきなり言葉の通じない恐竜のような人？に話しかけら

れたのであった。

「フェイテン・イングリッシュ・ゼラメーション！」

謎の呪文が聞こえ、振り向いてみるとナイツさんがいた。

「これで、意味が分かるだろ！」

「あんたがタクミか？」

「そうだけど！だから何さ！」

「こらタクミ！このお方は偉大なるゼイノリング・ギャリットスクラム様だぞ！」

「え！さっき言ってた？」

「そうだ、私こそが魔導士の力を生み出した、ゼイノリング・ギャリットスクラムであるぞ！」

「ま・・・魔導士の力を生み出したー！！！！！」

「そう、だから年齢も相当なんだぞ！」

「え！いくついくつ？！！！」

「こら！失礼だぞ！」

「ま、それはいいとして、私はお前に指令を出しにきた。お前は、いや、お前達は、四つある玄武の玉、朱雀の玉、白虎の玉、青龍の玉を、北、南、西、東にある島から取って来なければならない。」

「その島はどこにあるんですか？」

「そのようなことを知った所でどうにもならん」

「どうしてです？」

「この世界の海には迷いの霧という物がかかっているんだ！」

と、ナイツさんが早々といった。

「そう、ナイツクの言うとおり、この世界の海には迷いの霧がかかっている。その霧は、悪き者をスカイリングパレスに近付けないために中にいる守人達が張った結界のような物なんだ」

「そうなんだー！でもさ！それじゃあ僕達が玉を取りにいけないじゃない！」

「ライヤよ、慌てるな、一つ玉を見つけると、その玉が次に取りに行く玉の行き先に向かい、光りが出る。」

「でも一つ目の玉はどうやって取るのさ！」

「大丈夫、ここは東の青龍の島だから！」

「え~~~~~~~~!!!!!!」

「さ、帰館の鏡も使えるようになったことだし、玉探しの旅に行くか！」

第6章 〈前編〉 フェイクブルー

二〜三日の間、僕達はうろうろとこの世界をさまよい歩いていた。その結果、僕はあることに気付いた。

一つ目、ここは僕の・・・僕達のやっているゲーム、「ジュライズ2」になんとなく似ている。まあ、僕達がやっているのには青龍とかなんかいなかったし、それにここにはモンスターがいな・・・って、モンスターがいなきゃどうやってレベルアップするのだろう！！タクミは魔法が使えるけど、僕はまだ武器すらない！！そんなじゃあボスなんかには勝てるわけがない！！

まあそれは置いて、二つ目に気付いたことは、人だ！この世界で僕達は、今のところナイックさん以外の人を見たことがない。けどゼリーとギャンブルスクリームさん？（だっけ？）みたいな人は会ったんだったよね。

三つ目、いったいいつになったら町に着けるんだ！

そんなことを考えながら歩いていた。

「ライヤ！あそこに人が・・・」

人に親切にすると本当にいいことがあるよね！

例えば何かを貰えたり、代わりに何かしてもらったり・・・

今僕達は、ナイックさんの小屋から少し離れた町にいる。しかも武器をもって！

何故？皆そう思うだろうね！そう思ったなら四〜三行前を見てみよう！

そう、僕達はいいいことをしたんだ。まあほとんどタクミがやったんだけどね！

宛もなくさまよっていた僕達。全くの無防備で歩いていた僕達。しかし今はそんなことはない。

立派に刃の欠けた小刀を腰に差しているのだ！

まったく、これどう戦えばいいものか・・・

この小刀はお礼らしい。（ただのごみに近い存在だが・・・）しかし、これを渡してくれたおじさん（おじいさん？）にとっては大事な物だったらしい。これを僕達に渡す時、かなり悩んで寝込みかけたぐらいだ。そのせいで、おじさんの家の中で二時間くらい待ち続けた。もともと僕は「たいしたことをしてないし、御礼なんていらない」と、言ったのに、無理やりおじさんが連れてきた（引っ張ってきた）のだ。そのせいで僕達の旅は遅れを取った。

「二人とも！まだ鏡が上手に使えるわけでもないのに遠くに行っちゃいけないよ！鏡を使うのには膨大な魔力がいるのだから」

気付くとナイックさんがいた。

「しょうがない。それじゃあ・・・」と、言い、僕達をつかみ、飛び上がった。その時の感触に、何だか懐かしい物を感じた。

その日僕は家に帰り、何故帰館の鏡を使うのが大変なのかを考えていると、突然睡魔に襲われた。

翌日、昨日考えていたことを聞くと、ナイックさんは、あつという間に答えてくれた。

「あのだね、帰館の鏡を使うということは瞬間移動と一緒にの原理なんだ。まず瞬間移動ということについて考えてみるとだね、とある物体を量子レベルの粒にして、その量子となった物体を、光よりも早く動かすということだ。それをやるためには、EPRペアという量子もつれの関係を利用しなければならない。例として言えば、AさんからBさんへ、何かを瞬間移動で送る時、量子状態にして送らなければそしてAさんは、EPRペアの光子二つ（光子一、光子二）を生成し、光子二をBさんに送る。そしてAさんは光子一を観測する。そうすることで光子二の量子を確認できる。しかしそれはあくまで物でやる時の話である。物の時は簡単だが、人でやるとかなりの力が必要となる。もし瞬間移動で自分を運ぶとする。その時、人

を量子にする時、ものすごい負荷がかかる。その物体を運ぶための力が自分の体の中作られるわけだから当たり前かもしれない。だが、帰館の鏡では、その鏡を使う人の魔力を力とする。だから必ず旅には魔導士が着いてくれていたんだよ、君達は特別だけだね！どう？なんとなく分かった？」

僕は話が長くてよく分からなかったけど、ガツカリさせないように納得したような顔をした。

「アインシュタインⅡポドルスキーⅡローゼンのパドラック（EPCパドラック）ですね？」

突然タクミが割り込んできた。

それにしてもそのアインシュタイン何とかって何だろう？アインシュタインだけならなら利いたことがあるけど・・・

「多分ライヤが考えている人はアルベルト・アインシュタインだと思うよ！相対性理論などを発表した物理学者の」

「え？あのべろ出して人？」

「そうだよ！EPCはね、学者の名前を三つ合わせたものなんだ！アルベルト・アインシュタインとボリス・ポドルスキーとネイサン・ローゼンの三人」

今日はうろろしないでタクミの魔力上げを手伝った。

第6章 く後編く フェイクブルー

今日の学校はいつもよりも嫌な雰囲気だ。それに、今日は学校をたっ君が休んだ。高い熱だそうだ。そんなこともあって、今日は授業が身に入らなかった。

学校が終わり、たっ君の家へ向かうと、扉が殺気立っていた。

いつも通り、たっ君は二階の床に正座をしながら待っていたが、いつもよりもやっぱり辛そうだ。昨日の修行が応えたのだろう。

「じゃ、いこっか・・・」

辛そうにたっ君が言う。僕が迷っているとたっ君はまた言った。

「うちに来たってことはあそこに行くんだろ？行きたくないんならいいけどさ・・・」

「そ、そんな事無いけどさあ・・・だってたっ君辛そうだから・・・」

「そんなの向こうに行ったらナイックさんに治療魔法をかけてもらうから大丈夫だって！」

「そう？」

「そう！大丈夫だって！心配しないでよ」

この言葉を聞いた時にはもう学校の雰囲気なんか忘れていた。

向こうに着いたらナイックさんが頭を抱えていた。

「どうかしたんですか？」

一瞬間が空き、ナイックさんは呟いた。

「来る・・・あいつが・・・とうとう俺の秘密が暴かれる・・・」

最後のほうはもう呟きではなくうめきだった。それにしても、ナイックさんの秘密？いったいなんなのだろう・・・

「やあ！」

後ろを振り向くと小太りの小父さんがいた。

「頼む、出てっくれ」

「どうしてだい？せっかく君の捕らわれているかわい・・・」

「うるさい！そのことはもう知っている。」

かわいい？ナイツクさんたちはいったい何を話しているのだろう・

・

「知っているなら話は早い、今から助けに行こう」

「すまない。今の私にはこの子達の旅の手伝いをするようにとゼイノリックさんから言われているのだ」

いつもならちゃんとフルネームで言うのに何故か今日はゼイノリックさんとしか呼ばなかった。・・・・・・最初からそう呼んでくれれば覚えやすいのに・・・・・・

タクミはさっきからの会話が気になったようで、何のことを話しているのかを聞いた。

「ああ・・・・この人はジンといってね、私の魔法学校（大学）の頃の友達なのだよ」

どうも話を別の方向に逸らしている様な感じがした。ま、今のことも結構気になっていただけど・・・・

「そうじゃなくてナイツクさんのかわいい何かのことだよ！」

タクミがしつくく聞く。

「あ・・・・ああこの人はね、君達と同じ世界から来たのだよ」

またナイツクさんは話を逸らした。

「いいじゃないかそれぐらい」

ジンと呼ばれていた人がそう言うのと、

「駄目だ！だってこいつは・・・・」

と僕を指差し、はっと気が付いたかの様にジンさんにこそこそ話をした。

「確かにそれはまずいかもしれない。でも、話したってばれなきゃいんだよ」

「ばれなきゃいい？俺は常に見張られている。無理に決まっているじゃないか」

ナイツクさんの顔マジ怖い。

タクミも同じことを感じたのか、

「もういいです。ありがとうございました」と言った。

今日はナイックさんがかなり暗いので、ジンさんと僕達の持っているナイフの練金とやらをやった。ジンさんの話によるとこのナイフは幻のナイフで、「幻の剣」サイジヨンズアーマーといい、大昔にこの世界を作った人？（人かどうかは、はっきりしない）が作った武器といわれており、この世に三つしかないといわれている。そして一つは「スカイリング・パレス」というところに保管されているようで、僕達にナイフをくれた人はきつと家宝か何かをレア物だとは知らずにくれたのだらうと言っていた。

練金の準備を始めようとすると、ジンさんがタクミはカッコイイ魔導師の杖を、僕はどんな武器でもいいがなるべく剣系の武器を創造しながらたたけと言われ、「どうして？」と聞くと、これだけレアな素材（今ではこのヴィジョンズアーマー）だと自分の頭で創造したのができるのだそうだ。そしてなぜタクミは指定されたのかは、言われなくても分かるよね？そして僕がなるべく剣系の武器にしたほうがいいと言われたかという、なんか剣の方がRPGっぽいからだそうだ。

「さ、練金を始めようか」

「え？まだ何にも用意してないじゃない。アニメとかだと火で真っ赤にしてからトンカチで思いっきりたたいて伸ばしていくよ」

「ははは、まあそんな感じにやることもあるけれど、今回は小さいナイフだ。普通練金する時は剣をやるからな、まあナイフは合成に使うくらいだからな。そうゆうことで、ナイフは焼いてやる練金不可能なのだ」

「え？じゃあどうやってやるの？」

「ははは、その為に俺がいるだろ！ガハハハハハ」

よく笑う人だなあ・・・それにしてもこの人は僕達と同じ世界から来ただけあっていろんなことを知っているなあ・・・あれ、何でこの人はここに来たのだらう・・・僕達みたいになまたま

来たのかな？それに名前のジンだ。普通この世界では名前のほうを呼び捨てにして呼ぶんだよね、ならジンって名前日本より外国ってイメージがある様な気がするし、まあ名前の付け方なんて人それぞれだけど気になる・・・あつ、そういえばナイツさんも日本人っぽい顔してるのに変な名前だなあ・・・でもどこかで聞いたような名前だ・・・ま、気のせいだろう。

「魔導師がいれば出来るならさっさとやってこの世界からライヤの父さん見つけようぜ」

「タクミ・・・」

「え？何でいるって知っているの？お前の父さん・・・・・・・・そうか、じゃあ早く助けられないとな！お前の父さん・・・・・・・・」

ジンさんは変な顔をしながら言った。

「ま、さっさと練金をしよう」

タクミがそう言うのと、ジンさんがニコリと笑い変な呪文を唱え始めた。そのとたんタクミは寝だした・・・

三十分位経って（体感）ジンさんは呪文をやめた。するといきなりヴィジョンズアーマーが光りだした。

いままで寝ていたタクミを起こした。

「ふ、ふわああああ。あれ？何だか体が重い・・・」

タクミがジャンプをしながら言った。

「ごめん、ごめん、ヴィジョンズアーマーの練金には思ったより魔力が必要だったから魔力を借りちゃった・・・・ははははは」

「魔力を使うとこんなに疲れるの？」

「君は初めて魔力を使ったからね、初めはかなり疲れるのさ！僕も初めは疲れて寝込んだじゃったりしたよ。でも君はゼイノリック爺さんの力の持ち主だ、こんな大仕事を二人でとはいえ初めてでやり遂げたのだから・・・」

タクミがゼリーさんの力を持っている？どうゆうこと？

「あの・・・俺がゼイノリックさんの力を持っているってどうゆう

事ですか？」

「あれ？ ナイックから聞いてない？」

「はい……」

「そうか……。何であいつはこの子達にヒントを与えるのが嫌なんだ？ ……」

「ヒント？」

「いや……。こっちの話だよ！ ……まあ簡単に言えばタクミには魔力が満ちているって事さ！」

「へへ」

「で、出来たの？」

「ああ！」

ジンさんは床を指差しながら言った。

「後二、三時間で冷めるだろうからな！」

「そしたら旅に出よう！」

「了解！」

第7章 航海士

「では行ってきます!」

僕達はヴィジョンズアーマーを腰にさし、ナイックさんの小屋を後にした。

「んにしてもかっこいいなあ」

僕は腰からシュツと抜く。

「いやあすばらしいですねえ……」

「だれですか?」

目の前にはいかにも詐欺師っぽい恐竜がいた。

「恐竜じゃなくてジュラ族と言うんだよ恐竜みたいな奴の事をここでは」

振り向くとジンさんがいた。

「ジンさん!? どうして?」

「いや、大事な事を忘れててね……」

「大事な事?」

「ああ、この詐欺師っぽいジュラ族は俺の友達でな、＜航海士＞なんだ!」

「つまり?」

「君達の島渡し役を買ってくれたんだよ」

「でもまだ青龍倒してないし……」

「その後さ!」

「あ……そう」

「ま、青龍まで連れて行ってくれるらしいよ」

「ああ! 家が青龍のすみかの隣だからねえ」

「へ、へえ……」

航海士のジュラ族に連れられ僕達は青龍のいる洞穴へやってきた。
「ここが青龍の洞穴……」

「んじゃ、私はこれで！」

「え？手伝ってくれないの？」

「あ、当たり前でしょ！旅人の手伝いを魔導師以外がしたらこの世界に災いもたらされるんですよ！それにいくら魔導師でも旅人じゃないけりゃ玉集めはしちゃいけないんです！」

「へえ・・・」

「最後に一つ・・・私の名前は航海士の亘わたりといいますので！」

「どうもありがとうございます！亘さん！」

「いえいえ！」

そうして亘さんは歩いて行った。

「タクミ？大丈夫？」

タクミはさっきから一言も喋っていない。どうかしたのだろうか？

「おーい？」

「・・・」

分かった。おそらくタクミは緊張している。

「入るよ！？」

そうして僕は青龍の居る洞穴へと歩を進める。

第8章 VS青龍

「結構明るいなあ・・・」

洞窟の中はゲームのダンジョンの洞窟と違って松明がいらないうちに明るかった。

「ようこそ私、青龍のお家へ」

そこにはすでに自称青龍の青い蛇がいた。

「お前が青龍？」

「はい！で、戦いに来たんですか？」

「ああ、で、本物の青龍に会わせてもらえないか？」

「だ、か、ら！私が青龍です！！」

「・・・こいつが青龍だぞ」

「タ、タクミ！」

「さあ勝負しようじゃないか！青龍よ！！」

「ああかかってこいや！」

「やあああああ！」

オレは青龍に向かっておもいつき切り掛かる。

「へ、効くかよ！そんなヘッポココンビの攻撃！」

「誰がヘッポココンビだって？」

瞬間移動魔法でタクミが青龍の背後へ回り込む。

「エスケリオ！」

バン！！

青龍の目の前に小さな爆発が起きる。

グサリ！

その爆発を利用して僕が切り掛かる。順調だ！

「ふふ、ふふふ・・・」

なんだ？今の所は何も起きていないがなにか隠してるのか？

「以外にお前達はやるようだな！」

バチバチ！

目の前で火花が飛ぶ。

目を開けるとそこに青龍がいない。

「ライヤ！上だ！上を見ろ！」

タクミの顔が怖い・・・

「全く、なんだよ！」

そして上を見ると・・・

「きゃ、ぎゃあ~~~~~~~~!!!!!!」

上には数十メートルはある青い胴体に赤い髪を生やし、手には雷マークの刻まれた玉を握っている青龍の姿が・・・

「お前達の期待に答えて、完全体になってやったぞ！」

「ファイア！」

タクミが炎を放つ。

ジュッ！

肉の焼ける臭いがした。

「そんな技が効くかあ！」

そして青龍は手に握っている玉を投げた。

ジキーン！がががが・・・

凄まじい音響が耳を貫く。

「え、エスケリオ！」

「ビーツグ・・・・・・・・サンダァ——————！」

バ——————ン!!!!!!

またもや凄まじい音響が・・・

「ぐ、・・・」

そして目の前には恐らく雷にやられたのであろう傷が・・・

「タクミ!!!!!!」

「大丈夫、こんぐら・・・・い治療魔法で・・・・一・・・・瞬だ・

・・・！」

「ゲャァァァァァ————オ————!!!!!!」

青龍は僕に向かって来る。

「負けるかあゝゝゝ！」

ヴィジョンズアーマーを構える。

キンッ！！！！

甲高い音が鳴る。青龍は強いが流石は伝説の剣！青龍を押し返している。

「斬！」

やばい！やられる。一秒、二秒、三秒と経つ。しかしいくら経っても変化は起きない。

「大丈夫か？ライヤ」

「た、タクミ！？」

そこにはさっきまでずっとたばろになっていたタクミの姿があった。

「やるな、坊主！」

青龍は目玉をひんむきこちらを睨んでいる。

「いくぞ、ヴィジョンズアーマー！」

もう一度僕はヴィジョンズアーマーを構える。

「これで決める」

そして青龍は突進してくる。

「負けるかああああ！」

「うおおおお！」

そして凄まじい爆音がこの洞穴鳴り響く。

突如青龍の体が光り出した。

「な、なんだ！？」

オレはてっきり青龍が完全体かなんかになろうとしているのかと思っていた。しかし青龍は尾っぽの方から溶けるよう崩れていく。

「勝ったの・・・？」

するとまた、今度はさっきよりも強く、より神々しい光りを放った。そして僕はその神々しい光りの正体を認識した。

「青龍の・・・玉だ」

「ああ、まず一つ、オレ達は手に入れたんだ」

「さて、亘さんの所へ行こうか！」

僕達は亘さんの歩いて行った方へと歩を進める。

「君達、よくやった！だが直に日が落ちる。帰りなさい！」
ナイックさんだ。

「よし、帰還の鏡を使うぞ！」

「うん！」

タクミは帰還の鏡の使用に興奮していて気付かない様だが、この時僕はナイックさんの様子が変わった事が付いていた。

「ほら、ライヤ！早く行くぞ」

タクミに言われ、僕は急いで向かう。

「この鏡に入るんだとさ！」

タクミが先に入った。続いて僕。

そして僕達はたっ君の家にいた。時計を確認すると三時半。来た時と同じ時間だ！

「雷也、今日は・・・」

そう言ってたっ君はそのまま僕に倒れ込む。来る前までは熱で休んでいたんだ。仕方が無い。

「じゃあ、また明日」

たっ君をベットまで連れて行き、僕はそっとたっ君の部屋を出た。

「雷也君ありがとね！」

「いえ、いえ・・・あ、おじゃましました！」

そして創野家を後にする。

「また明日！」

僕はたっ君やナイックさんに向かって大きく言った。

「また明日！」

第9章 テロリスト

「行くぞ！雷也！」

次の日、僕達は再びあの世界に行く。

「こんにちは、ナイックさん！」

向こうに着いたらナイックさんが昨日と同じ場所にいる。向こうの世界（今ではこっちの世界だが・・・）昨日から日がずいぶん傾き始めていた。

「さ、亘さんの所へ行きましょうか」

「亘の所へは行くな！」

「ど、どうしてですか？亘に会わないと僕達は次の島へ行けないじゃないですか」

「今あいつのいる村はテロリストに乗っとられたんだ！運良く亘はお前達に会いに行っていてテロリストには会わなかったらしいが今の亘はお前達を次の島に送っている暇なんか無いんだ」

「だったら僕達でテロリストを倒しましょうよ！」

「お前達なあ、そう簡単に倒せると思うか？」

「オレは言っていないので達では無いです」

「それはいいとしてテロリストを倒しましょうよ！」

「無理だ」

「なんでですか？」

「そうです、やめて下さい」

「わ、亘さん！」

「君達が来ると足手まといだ」

「僕達は青龍を倒しましたよ！」

「青龍は私でも倒せます。しかし青龍達を倒す権利はあなた達旅人にしかありません」

「分かりました、オレ達は修業でもしてます」

「ちよっ・・・タクミ！」

「亘さんが足手まといと言っているんだ。オレ達はそれを否定する権利は無い」

「ちえっ、困ってる人を助けるのは当たり前なのに」

「ライヤ、行くぞ」

「どこに？」

「どこって亘さんを助けにだよ」

「そうだな」低い声が答えた。

「じ、ジンさん！？」

「オレの鍛えてやった剣の力を見せてやれ！ま、オレも行くがな・・・ガハハハハハ」相変わらずよく笑う人だ。

「いいな、こっから先が亘の住んでいる村だ！」

「はい」

「お、警備に奴らが来たようだな・・・」

僕が村の方を見ると確かに村から迷彩服の男が出てきた。そしてこっちに向かって・・・

「今だ！」

「エスケリオ！」

迷彩服の男の目の前で爆発が起きる。

「よし・・・」

どうやら気絶したようだ。

「服を脱がせろ！」

警備に行った男がなかなか帰ってこないのを不信に思ったのか今度は二人連れの迷彩男来た。

「エスケリオ！」

「何だ！」

「いこいつらはさっきのやつよりもやるようだ！」

「お、お前ら何だ!？」

「タクミ、いいもん見してやるよ」

そしてジンさんは呪文を唱えた。

「ハバネロ!」

迷彩の男たちに巨大な炎が包み込む。

「は、ハバネロってたしか無茶苦茶辛い唐辛子だよね……」

「ああ……ま、服を剥ぐぞ!」

あれからテロリスト達の迷彩服を剥いだ僕達はそれを着て村へと入った。

「おい、お前たち誰だ……」

早速ばれてるし……

「あ、あの私達は……ん? 亘?」

そこには亘さんがいた。

「あれほど来るなど言っただろ! しかもジン!」

「大丈夫、この子達は強い!」

「しかたない……ここまで来たら引き返せないぞ」

「分かってますって」

「ここがぁいつらのアジトだ」

僕達はそろっと扉を開ける。

「ジュパス」

扉を開けるといきなり邪気が襲い掛かってきた。

「ヴァ、ヴァンパイア!？」

アジトの中には不気味に輝くヴァンパイアがいた。

「ハバネロ!」

「エスケリオ!!」

ジンさんとタクミが危険を察知したのか呪文を放つ。

「ジュパス」

再び謎の呪文を唱える。

するとハバネロの火力が弱くなった。

「は、ハバネロが!？」

「エスケリオ！」

爆風を送り、ハバネロの火力をとつさにサポートする。

「デビピット」

ヴァンパイアから無数のこうもりが出てくる。

「こいつらは僕達に任せて！」

僕と亘さんは次々にこうもりを倒す。

「やるな・・・」

あのヴァンパイアが始めて呪文以外の言葉を話した。

「だが・・・終わりだ! デス」

目の前が真っ暗だ・・・ヴァンパイアの邪気にやられたのだろ
うか？

『今こそヴィジョンズアーマーの本来の力を目覚めさせるのです』

暗がりには神々しく輝く人がいる。

「ライヤ・・・」

隣を見るとタクミがいる。

『二人とも、行くのです!』

目の前には不敵の笑を浮かべるヴァンパイアと倒れているジンさ
んと亘さんがいる。

「くられ、真のヴィジョンズアーマーの力を!!」

「お、お前達・・・何故!？」

「ミラクル・ヴィジョン!!!」

「ふ、二人とも・・・」

しばらく経ってジンさんと亘さんが目を覚ました。

「ありがとな・・・さ、次の島へ行くか！」

そして僕達はジンさんに別れを告げ、亘さんと船に乗り込んだ。

「折角二人が行くのにナイツクったら何してんだ？」

「そろそろ出るぞ」

「「はい！」」

「頑張れよ」

「「勿です！」」

「じゃな！」

そして僕達は次の島を目指して動き出した。

第10章 迷いの霧

今あるのは白い物……。

亘さんの操縦する高さ約五メートル横十メートルの船（通称亘丸）は出港から二、三分で白い霧に包まれた。

亘さんが言うにはこれは迷いの霧といって方位磁針、方向感覚、ナビ等の海を渡るのに的確（？）な指示を出せるものが全て無効になるのだそうだ。つまり次の島はまだどこに着くかは分からないそうだ。まあ一度行った場所は帰還の鏡に記憶されるためにいくらでも行けるらしいからタクミの魔導師修業は直ぐに行けるだろう。

「なんだ……？ここ？」

不意に亘さんが呟いた。

「どうしたんですか？」

「いや、ここに島があるんだ！霧があつてよく見えないが確かにある。だがここは東西南北のどの島でも無い、見た事の無い島だ……」

「上陸して見ますか？」

「ああ」

「んじゃ行きましようよ」

と言ってタクミが先に行ってしまう。

『これより先、スカイリングパレス聖なる力を得た旅人のみの入場を認める』

島に上陸するとこんな看板があった。

「聖なる力を得た旅人？聖なる力って何？」

「スカイリングパレス……これはジュラ神話に出てくる聖なる都市だ」

「聖なる都市！？」

「ああ、では多少ロスタイムだがジュラ神話に出て来るスカイリン

グパレスの話をしようか」

「「お願いします！」」

「昔、昔の超昔にビッグバンが起き、この宇宙が出来た。

やがて惑星地球が出来た。

やがて地球では生命が誕生日していき、そのうち恐竜という生命が誕生した。

そして、ある日時空のねじれが起きたのだ。

そのねじれに一部の恐竜達は吸い込まれた。

そして吸い込まれた先はこの世界だったんだ。

やってきた恐竜はこの世界に住み、やがて進化を成し遂げた。

そう、君達人間のように話せるようになったんだな！やがて話せるようになった恐竜達、いや、ジュラ達は権力者を生み出した。

それになったのが魔法を作り出したジュラ、『ゼイノリック・ギャ

リット・ヒューストン』つまり『ゼイノリック・ギャリットスクラ

ム』様のヒイヒイヒイヒイジイサンなわけだか、そのヒュース

トンさんがこの世界を治めるようになったのさ。やがて時は経ち、

またもや時空のねじれがやってきて、こんどは地球で誕生したホモ

サピエンス・・・人間が現れたのさ。ここの世界に感動した人間

はやがて協定を結び、東西南北の島の中央に、スカイリングパレス

を建て、そこで旅人を待っているとの事だ・・・」

「ゼイノリックさんのヒイヒイヒイヒイジイサンが魔法をあみだした・・・か」

「さあ、そろそろここを出ようか！早くしないとな！」

「お願いします」

そして僕達は再び出港した。

第11章 く前編く 明かされた真実

霧が晴れる。目の前に一筋の光。

「迷いの霧を抜けたぞ！お、ここは南の島だ！」

「南・・・四神^{しじん}で言えばさっきまでいた島が東で青龍。ならば朱雀か」

「タクミってやっぱ博識だね」

「ライヤよりはな」

「よし、二人とも！私は一端東の島へ帰るよ！何かあったら帰還の鏡で知らせてくれ」

「え、帰還の鏡でどうやって亘さんと話すんですか？」

「ナイックの奴何も教えてないなあ・・・あのな、実は帰還の鏡は携帯電話のテレビ電話のようなもので・・・つとその前に君達はDNAが人間などの生物にある事を知っているかい？」

「あんまり」

「え！？ライヤ知らないの？」

「僕はタクミのように博識じゃないからね」

「DNAとはデオシリボ核酸の略称でね、まあ人間、ジュラ、虫などの形を作る設計図みたいなものなんだ！遺伝子に近いかな？難しく説明すると生物の遺伝的な形質を規定する因子であり、遺伝情報の単位とされる。遺伝情報の実体は DNAの塩基配列である。例外としてRNAウイルスではRNAが遺伝情報を担っているものが遺伝子なんだ！」

「RNAってなんですか？」

「RNAとはリボ核酸のことさ！んでリボ核酸とはリボヌクレオチドがホスホジエステル結合でつながった核酸である。RNAと略されることが多い。一本鎖のポリマーであるが、例外も存在する。RNAのヌクレオチドはリボース、リン酸、塩基から構成される。基本的に核酸塩基はアデニン (A)、グアニン (G)、シトシン

(C)、ウラシル (U) のいずれかである。RNAポリメラーゼによりDNAを鋳型にして転写(合成)される。各塩基はDNAのそれと対応しているが、ウラシルはチミンに対応する。RNAは生体内でタンパク質合成を行う際に必要なリボソームの活性中心部位を構成している。

生体内での挙動や構造により、伝令RNA(メッセンジャーRNA、mRNA)、運搬RNA(トランスファーRNA、tRNA)、リボソームRNA(rRNA)、ノンコーディングRNA(ncRNA)、リボザイム、二重らせんRNA(dsRNA) などさまざまな分類がなされるもの!」

「む、難しくて分からない・・・」

「ははは! まあ帰還の鏡でチャットみたいなのができると思ってよ! で、肝心の使い方なんだけどね、実は普段はただの裏表の無い軽い石の塊みたいなこの帰還の鏡には裏表があつてね、とある事をするととっても便利な鏡なんだ!」

「とある事とはなんですか? 百聞は一見に如かずと言うので説明しながら亘さんが手本を見して下さい」

「タ、タクミ! そんな事言ったら亘さんに失礼だよ!」

「ハハハ! 大丈夫! ノープロブレム(心配無用)! 流石はタクミ君、拔かりが無いね! よし、よく見るんだよ!」すると亘さんは帰還の鏡を地面に置き、手で窓を作るような事をした。

「&#十|*#&??!@.~「^、」><」。ゝ。ゝ。ゝ~℃

¢£\$☆★♀♂∴!」そして亘さんが意味不明な言葉を言った。

「あのゝ・・・」

「ん? なんだい!」

「なんて言ってたんですか?」

「ああ! あれは呪文だから後でゆっくり教えてあげるよ! っと、後は呼び出す人を決めて・・・っと! よし! ナイックを呼んだからナイックが気付いたらこの鏡からナイックの姿が現れると思うよ」

「ありがとうございます! んで呪文を・・・」

「ああ！呪文はね！」

『亘、亘か！？助けてくれ！』そこに写っているのは傷だらけのナイックさん……

「ナイック！？どうした？まさかまたあいつらか？」

『ああ……今、ライヤは？』

「いるよ、大丈夫ですか？」

『ライヤ、今から言う話をよく聞け！』

「はい……」

「ナイック……まさかあの事を言うのか！？」

『すまんな亘！あのな、ライヤ！ナイックは……私はお前の……』

「やはりそうでしたか」

『タクミくん……君は気付いていたのか』

「はい、はじめから直感的に感じてました」

『なら話は早い、ライヤ、私はお前の父親だ！千野銳投槍だ！』

「そんな……嘘だ……父さんが……ナイックさん？」

「名前を考えれば分かるだろ？鋭投槍↓くない↓クナイ↓クが無い、ク↓ナイク↓ナイックと！」

『よくそこまで分かったなタクミ君！だが君も知らない事が一つあるんだ！それは、君の義父がゼイノリックさんだという事だ！いや、そう言うに変に聞こえるが君はゼイノリックさんの力を受け継いだためにここにライヤと一緒に来られたんだ』

「段々話に着いて行けなくなってきたんですが……」

『まあんでタクミ君は特別な存在なんだ！いわゆる千野家の救世主になるべく存在かな？』

「オレがライヤん家の救世主？意味不明です」

『タクミ君、ライヤには昔姉がいた事を知っているかい？』

「はい、ライヤから何度も聞きましたしライヤん家に遊びに行った時家にあなたの写真と一緒に飾られてましたのを見た事もあります」
『そうか、んでそのライヤの姉、勝優^{ゆうり}近ってんだがな、この世界に

いるんだ』

「不思議な名前ですね、鋭投槍といい、当て字ですか」

『ああ、もう死んじまった私の父が当て字好きだったもんでね、私と勝優近は当て字なんだよ！で、本題に入ろうか』

第11章　く後編く　明かされた真実

「で、本題とはなんですか？」

『ああ、さっきも言ったライヤの姉はスカイリングパレスという場所に監禁されてれているんだ！』

「スカイリングパレス！？さっき行った場所じゃないか！そこに姉ちゃんがいるの？」

『ああ、だがあそこは聖なる結界が張っていて入れなかっただろ？』
「う、うん・・・」

「しかしスカイリングパレスの使用人はゼイノリックさんのおじいさんが作っただんじゃ無いんですか？」

『そうだ。だから本来あそこはゼイノリック様達、魔導師十剣豪によって治められるはずだった・・・』

「魔導師十剣豪？」

『魔導師十剣豪とはゼイノリックさんと、冥界の公私と言われる水のマーキュリー、金のビーナス、地のアース、火のマーズ、木のジュピター、土のサタン、天のウラヌス、そして冥界でもっとも力のある冥を司るプルート・・・』

「つまり地球という水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、冥王星のそれぞれの名称がそこに当たる十剣豪のうちの九剣豪の名前についているんですね？」

『ああ、タクミは博識だね、今度ライヤに勉強を教えてやってくれない！んま、生きて帰ればの話だけど・・・』

「そ、それってどういう事！？」

『ああ、実は冥のプルートが裏切ってな、っとその前に冥界の仕組みについて説明しよう！』

「お願いします」

『ああ、この世界の出来るまでは亘から聞いたかい？』

「聞いたよ！恐竜がこの世界でジュラになったんだよね！」

『人間の事は？』

「それも聞きました」

『なら話しは早い！ジュラで魔法、専門用語で魔術はゼイノリック様の先祖が作り出した。そして空間のゆがみで四人の人間がやって来た。その人間が今の九剣豪の先祖に当たる人さ！』

「九剣豪は人間なんですか！？」

『そうだよ？知らなかったの？』

「いや……そんな事聞いて無かったもんで」

『そっか……んま、それはいいとして』急にナイック（父さん）の目付きが厳しくなる。

『実はその冥界最強（自称）のプルートが実は裏切ってな……十剣豪を入れ換えようとしているんだ』

「……へえ。としか言いようが無いです。それがなんでライヤの父さんに関わるんですか？」

『ここではナイックと呼んで貰おうか』

「はい」

『んまあ、さっきも言った通り、ライヤの姉、を閉じ込めているのがその新十剣豪』

「なんで閉じ込めてるんですか？」

『ライヤ達はよくSF映画を見るかい？』

「よくではないですが見ます」

『なら分かるな。新十剣豪は人質にあいつ（ゆうり）を取って人間の世界を乗っ取ろうとしているんだ』

「そんな事が可能なんですか？」

『あいつらの魔力ならたとえ核爆弾を使っても傷一つ付けられないだろうな』

「なら勝ち目無いじゃないですか」

『人間の世界にあいつらはまだ行けないんだ。』

「まだ？」

『そう、本来人間の世界とここを行き来出来るのは旅人だけ。普通

の人間がこっちに来る事は無いし、こっちの住人が人間の世界に行く事は無い。だがこっちの住人が人間の世界に行く方法が一つだけある』

「なんですか？」

『旅人を使うんだ。』

「僕達を？」

『いや、お前の姉だよ。オレ達人間は皆もともと旅人としてこっちの世界に来ている。ジンだってそうだ』

「で、ライヤの姉ちゃんをどう使って行くんですか？」

『手順はこうだ。まず、旅人の心に穴を開ける。つまり心を傷つけるって訳だ。そして穴が出来たら拡大の呪文をかける。拡大の呪文とは物体を拡大させる呪文だ。そしたら次に侵入の呪文。そしてテレポートで完了だ』

「簡単すぎじゃないですか？」

『いや、侵入までは簡単かもしれないが、テレポートをのに大掛かりな用意が必要なんだ』

「それが揃う前に倒しちゃえばいいんだね。なら今すぐ行こうよ」

『いや、スカイリングパレスに入るには東西南北の玉と、封霊の剣というものが必要なんだ』

「そっか・・・」

「よし、今はまず朱雀を倒そう！」

『頼んだぞ』

「了解」

第12章 悪魔、クライドラゴン

「朱雀の住家ってどこだよ」

「恐らく地図が間違ってるねライヤ！」

あれから僕達はナイックさんから朱雀の住家を示した地図を転送してもらい、歩いている。しかしいくら歩いても変わらぬ景色。等間隔に生えた針葉樹。薄暗い道をなんども歩く。

「分かれ道だ」しばらく歩くと二股に別れた道にぶつかった。

「どっちに行く？」

「地図通りに行くとなれば右。人間の習性で行けば左だな」

「ここは地図にしたがおうよ」

「まあそれがセオリーだな」ナイックさんからあの話を聞いてからタクミは何故か急に変化した。どこがどう変わったのかはよく解らないけど僕はそう感じている。

「恐らくここが朱雀の住家じゃないのか？」一時間程かけて歩き着いた場所は古い廃屋だった。

「まさかあ。こんなボロイ家で朱雀と戦えるもんか」

「あくまで住家の可能性だってある。戦うには別の場所を使えばいいだろ。とにかく中に入るぞ」と言ってタクミはずんずんと廃屋に進んで行った。

「頼も～～～う！」ドアを両手で押し倒す。

「もう！道場破りじゃ無いんだから！」

「ははは。でもその方が気分が乗るじゃん？」そうか。タクミはナイックさんの話を聞いてから変わったんじゃない。タクミはここに来てから変わったんだ。今まで気付かなかったのは僕自身がこの世界に緊張していたからだだったんだ。そう、タクミは間違いなく明るくなっている。

「ラ～イヤ！何突っ立ってるんだよ？早く入るぞ！」

「あ……うん。そうだね」

「ひ、広い」

朱雀の住家（恐らくだが）は外見とは違い、中はかなり広く、新品どうような家。いや、それ以上。ここは豪邸だ！

「結界を張っていたんだな」

「結界？」

「ああ。スカイリングパレスの時にもあったようなやつだ。ほら、漫画でもあるだろ？」

「なるほど」

「でもな、それは他者を自分の許可無しに拒む結界。ここの結界は他者を誘引する為の結界なのさ」

「よく知ってるね」

「実はと言うとオレも結界を張る術はもう習得してるんだ。その時ナイツさんに色々と教わったのさ」

「成る程」

「It's a great!! 素晴らしい博識だ」どこからか声が聞こえる。そしてそれが豪邸中で共鳴する。

「朱雀か!？」

「違うよ。朱雀は喋らない。直接頭の中に語りかけて来てくれる。それにここが朱雀の住家だったら君達は間違いなく死んでいる。入った瞬間にね」

「ならお前は誰だ？」

「クライドラゴン。つまり嘆きの龍さ」

「嘆きの……龍？」

「おおっと、君達には通じなかったかね？ いわゆる悪魔さ」

「悪魔がなんのようだ？ 誘引結界なんて仕掛けて。おかげで俺達の時間がロスしたじゃないか。帰らしてもらおうぞ」

「まてまて待て……い!! 君達旅人だろ？ だったら俺を助けてくれよ。このまま朱雀の住家に行ったって死に行くようなもんだ」

「さっきから気になっていたんだが……。何故朱雀の住家に行くと死ぬんだ？」

「そうか、君達は知らないのか。なら教えてやろう。朱雀はな、体内から放射線を随時放出している。つまりその……。原爆と同じかな？」

「似ていますが違いますね。原爆は常には無いですから」
「比喩だよ比喩！」

「ならどうやって倒せばいいんですか？勝ち目無いじゃ無いですか」
「いいか、結界の事を知ってた坊主」

「タクミです。因みもう片方はライヤ」

「そう。じゃタクミ。君は確か結界をもう張れると言っていたね。なら複数の結界を同時に張る事は出来るかい？」

「出来ません。ってか不可能です。一つの結界を張るのでさえかなり疲れるのにそんな事したらもう死んじやいます」

「ははは。馬鹿デイ！クライドラゴンがただの魔術を教えると思っただか。このバカチンガーZ！」

「なら何を教えてくれるんですか？」

「呪術に決まってるだろ」

「却下です。どうせ副作用があるんでしょ？」

「当たり前だろバカチンガーZ！」

「ではさよなら」

「さて、副作用ったってお前らが思っているような悍ましいようなもんじゃ無いぜ」

「ならなんなんですか？」

「毛が一本増えるんだ」

「なんじゃその副作用」

「体のどこか毛ね生えている場所に毛が一本増えるんだ」

「それだけですか？」

「あたぼーよ！」

「なら教えて下さい」

「ただし条件がある」

「なんですか？ 命の契約なら結びませんよ？」

「俺を助けてくれ」

「は？」

「今俺はこの洋館にあるパンドラノハコに封印されてるんだ」

「悪い悪魔なんだ」

「違う！ 間違えて自分で研究していた抑止結界の実験をしている途中に間違えて自分の寝る棺桶にかけてしまったんだ。んでその棺桶がパンドラノハコって名前な」

「棺桶で寝るってバンパイアですかい！？」

「いあいあ。バンパイアなんて人聞きの悪い事言わないでよ。俺はれっきとした悪魔。クライドラゴンなの！」

「ならその棺桶はどこにあるんですか？」

「それが解らないんだ。この棺桶全自動そうちが付いていて自動的に移動するんだ」

「移動するなら全自動って言わなくない？」

「まあそんな訳有って助けて欲しい訳よ」

「了解。この館内探し回ってやるよ」

「頼んだぞ」

僕達は走り出した・・・。

第13章 呪術習得

「まずは一階から捜すか」

「それがセオリーだな。それにまずは一階にある食堂に行け。真っ直ぐ歩いて行けば壁があるがそれは結界が張ってあるだけ。直ぐに突破出来る。まずはそこまで頼むな」

「あのさ、クライドラゴンさん」

「なんだね？えっと・・・ライヤ君よ」

「貴方は今棺桶の中に居るんですね？ならどうして僕達に話しかけたり、今居る場所が分かるの？」

「なかなか鋭い質問だね。だがそれは愚問だ。なぜなら君は俺が悪魔だと言う事を忘れている。悪魔ってのは呪術を使って敵の位置、声等をどんなに遠くに居ようと探り当てる事が出来るんだ」

「なら自分の位置もそうやってやれば・・・」

「それも愚問だ。悪魔ってのは自分の行動は全て無音にするんだ。そしてオーラを呪術によって絶つ。故に備品も同じさ。だから俺は自分の位置が解らない。分からないで無く、解らないだ」

音声だけなので僕には何が違うのかは分からないが、恐らくそのワカラナイの違いは別にたいした事では無いのだろう。

「つまりは自分の居場所が貴方には感知出来ないって事ですよね？」

「んまあそうだ」

そんな事を話し合っているうちに僕達は行き止まりに突き当たった。

「ゆっくり入ろうとしては駄目だ。そんなんじゃ俺の結界は破れない。全力でぶつかって行け！大丈夫。痛く無い」

痛く無いと言われても、目の前にある壁に向かって全力でぶつかって行けと言われてビビらない人はいないだろう。それが正常な人間の考え。一般論だ。

「ほら、早く行こうぜ」

タクミの肝は尋常じゃ無いな。もしくは自暴自棄。いや、それなら僕を誘わずとも突っ込んでいたはずだ。つまりは前者に当たるわけだ。

「なんなら先譲るよ?」

「え、遠慮しとくよ」

「そう。なら行くぜ。ライヤも直ぐに来いよ!」　そう言うなりタクミは助走を付けている。

「ふりゃっ!」

地を力強く蹴る。そして飛翔。舞う。そう、タクミはとにかく跳んだのだ。その表現を飛ぶと訂正しなくてはいけないほど。

「やはりここは侵入者対策をされている。マジックスペースでもかけたんだろ?」

「たわけが。悪魔がそんな低級空間変動術を使うとでも思ったか?　そこは下にスプリングが入っている。壁にたやすく近寄るとそれで真上にビョヨンだ!」

「真上に行ったら何があるの?」

「試してみるかい?　あの世に逝く事になるだろうがな」

「うつ……。遠慮しときまーす」

「早く来いよ」

気が付いたらタクミが居ない。しかし声だけは聞こえる。

「壁の奥だよ!　あのまま跳べば壁の上ら辺に細い隙間がある。見た目が細く見えるのは呪術のせいだから大丈夫!　だからそこに滑り込むつもりで来い」

「ありやりや。ネタバラシしちゃつまらないじゃないの!」

「オレ達は一刻を争ってるんだ。本来ならおまえの事なんて放っておくんだがどうにもそうは行かないらしいから散策をしてやってるだけ」

「あまのじゃくだな、お前」

「悪魔に言われたくないね」

「そうですかい!……」

それから沈黙が続き、『KITCHEN』と書いたプレートの掛かった扉に突き当たった。

「キッチンでいいんだよね？」

「ああ。キッチンに入ったら直ぐ調理場に入れ！」

そして僕は恐る恐るドアノブに手を掛け、一気に開いた。そして一気に地を蹴り込む。

調理場まであと三メートルもしない距離だろう、不意に僕達の前に人の形をした白い霧もやといたらいいのか、霧といたらいいのかよく分からないが、そんな感じの物（者）が踊り出て来た。

「なんだこいつ？」

「#**&，..；+＃」

謎の言葉をはいて、白い物（者）は僕達目掛けて突っ込んで来た。

「こ、こいつ戦う気だぞ！？」

「みたいだね」

「なら・・・」そう言いながらタクミは杖を構える。

「エスケリオ！！」

バン！

爆発が起こる。

しゅっ

蒸気が上がる。倒したのか？

ジュン！！！！！！！！！！

小刻みな音が耳元を通り抜ける。

キキキィ！！！！！！！！！！

後ろの方で、小刻みなブレーキ音と共に蒸気が上がる。

そしてそこに居たのは紛いも無くあの白い物（者）であった。

「エスケリオを喰らって無傷だと！？」

「タクミ！あいつと戦ってはいけない！」

ようやくクライドラゴンが口を開いたがその時既に遅し。タクミは既に呪文を唱えていた。

「神童達よ冤罪の報黙の元に集まり汝に力を与える事を願わん。元

の者とも供に我が身を燃やして掛狂え！ 冤罪の爆炎豪よ！・・・
行け！ エスケリオ！！！！」

タクミに言わせるとこのような前置きが無くとも呪文を発動出来るらしい。現にエスケリオ単独でも出している。肝心な呪文の名前さえ入っていれば関係無いのだ。しかし前置きが有るのと無いのでは威力に関わるらしい。勿論前置きが長ければ長い程自分の体内で練られる魔力を最大限近くまで引き出せるのだそうだ。それを考えれば今のエスケリオを最強だ。これを喰らって無傷なわけ無いだろう。

ズバババババ！！！！

数度強大な爆発が起こる。

「やつには効かないよ。魔力の無駄だ。やつは攻撃に移るまでに三分は掛かる。その間にさっさと調理場に行きな！」

仕方なく僕達は調理場に逃げ込む様に滑り込む。

「結局あれはなんなんですか？」

「あれはジッパーといってね、この世とあの世の間にある久遠の狭間に住み着く生物なんだ。んであいつは久遠の狭間からの幻影。んまあ、向こうからこっちは見えてるから見つかったら襲われる。んでもってこの世の攻撃やあの世の攻撃では効かないって事！」

「そのジッパーはここには入って来ないの？」

「久遠の狭間でここに当たる場所はシーガ。シーガとは海に当たる場所なんだ。つまりジッパーは調理場には来ない」

「けどどうしてわざわざそんな奴が居る所に僕達を連れて来たの？」

「んなの簡単さ。この屋敷にはジッパーの如く珍獣がごろごろ居るからさ。んでそいつらにはジッパー同様この世の攻撃やあの世の攻撃は効かない。久遠の狭間の攻撃をしなければならない。そこで今からお前達に呪術を教える。呪術の起源は久遠の狭間なんだ。つまりジッパー達には的中なわけだ！！」

「それはわかったけどどうしてこの屋敷には久遠の狭間の生き物達が幻影として現れるんですか？」

「それは俺には分からない。この屋敷を建てた奴に聞くんだな！んま、もうとつくに死んでるだろうけど・・・」

「呪術を教えてくださいるんじゃないかなったんですか？」

「おっとそうだった！よし、二人とも壁にフライパンがあるな？」

僕達は壁をぐると見渡すが、フライパンらしき物はどこにも無い。

「結界の外の壁！」

「成る程」

そう言ってタクミは壁を手で探る。

四方に囲まれた調理場の壁の三分の一、つまり三枚目を叩き終わり最後の四枚目にある一番奥の壁を叩こうとした。

「あら？」そのとき僕はその壁に異変を感じた。ついさっきまでは気にならなかったようだが、何故かその壁だけが貼ってあるカバーの柄の向きが逆なのだ。些細な違いなので今まで気が付かなかったのだろう。

タクミもその事に気が付いた様で、じっと見つめている。

「入るぞ」

「了解！」

結界の中は外の調理場の雰囲気とは打って変わり、どこか、小さな時に嗅いだ事のあるような異臭が立ち込めていた。

「くっさ！？何この臭い。ヘドロじゃん」

ヘドロ……。僕の頭の中からその単語を引き出せない。常識のような単語。いつか小学校で習った単語。公害を引き起こしたモノ。喉元まで競り上がっているのだから、すんでの所で留まっている。「ねえタクミ。ヘドロって・・・」

「ライヤ！伏せろ！」

「え！？」ビュンという音が聞こえる。背中に大きな衝撃波。遠く

の方で僕の悲鳴が聞こえる。

「……」

目が覚めた。そこは自宅の布団の中。いや、そこにいるのは白い布を被った僕。死んだのか!?

タクミが居る。母さんが居る。ナイツさんが居る。ジンさんがいる。

やはり死んだのか。

死にたくない。僕はまだ生きたい。生きろ! 蘇れ! まだ死にたくないよオオオオオオオオオオ!

「……」

夢か。悪い夢だった。

ズバーン!!!!!!!!!!

轟音が轟く。

「フレイカヌーゼオ!」

タクミ!?

そして巨大なザリガニ?

タクミの手には黒いフライパン。

「フレイカヌーゼオ!」

ザリガニが炎上する。

「やっと目覚めたか」

「ク、クレイドラゴンさん!? これはどういうわけですか?」

「ああ。あいつはこの結界の番人だよ。呪術の力を引き出すフライパンを護ってるんだ! さ、早く取っておいで」

よく見るとタクミのすぐ隣にはフライパンが落ちている。

「タクミ!」

「おう! やっと起きたか」

直ぐにフライパンを拾う。

「こいつは呪術の練習用の敵だそうだ。こちらが攻撃を止めれば向こうも攻撃を止める。しかもここではダメージ、副作用無し！さ、術を出すぞ！」

「呪文が分からないんですけど・・・」

そう、肝心なのはこの呪文だ。

「あ、なるほど！えーっと。ライヤは・・・」

「君はレンジャー体質のようだね」

レンジャー。そうクライドラゴンさんに言われても僕には自衛隊のレンジャー部隊しか思い付かない。しかしあれが僕の体質だと言うなら間違いだろう。そもそもレンジャーなんての過酷な訓練に喜んで耐えられる程僕はMでは無い。

「レンジャーとはね。いわゆる勇者だ。勇者にはね、色々種類があってレンジャー以外にもファイターだとかブレイバー、ブレイカー等と様々なんだ！」

「その中の、レンジャー？」

「そ！」

「で呪文は？」

「勇者系統の呪文は簡単さ！何せタクミの魔術師系統よりも安直だからな」

「安直？」

「そ！魔術師系統には様々な呪文があるが勇者系統の呪文は自分の体質、いわゆる職業かな？を唱えればいいのさ。あ、もちろん全てに共通する事なんだけど、長い方が強いから」

「分かってます」

「んじゃ行ってみよう！」

「レンジャー！」

ボムッ！

煙が上がる。

「レンジャー！」

ボムッ！

再び煙が上がる。

「単語そのもので呪術を發動出来る靈力が君には無いようだな。困ったよ……」

「すいません」

「いや、君が謝る事は無い。こうなったら呪文を考えるんだ。ある程度長ければ大丈夫だろう」

「呪文……ですか？」

「勇者から思い付く単語をかつこよくまとめてレンジャーと最後に付けてみな！」

勇者、剣、魔王、ド○クエ、カツコイイ・・・うーん。なかなか難しい。

「よし！」

漆黒の魔帝を討伐し、ド○クエの如く人に好かれる。そしてカッ
コイイ正義の勇者。レンジャー!!!!!!」

ズ
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
！！！！！！！！！！

部屋が振動する。

「呪、呪文は目茶苦茶だけど威力は凄い！」

「ギヤオオオオ」

ザリガニが悲鳴を上げる。

「劫火の魔人よ降臨せよ、フレイカヌーゼオ！」

続いてタクミも呪文を唱える。

部屋とザリガニが共鳴しあい、大きな地響きが興る。

炎上。そして爆発。

「合格だな。これくらい出来れば朱雀も倒せる」
部屋の奥からコツコツと足音が聞こえる。

「誰だ!？」

「ははは、心配するな」

そう、そこに居たのはジンさんだった。

「どうしてここに？」

「ああ、お前らに呪術を教えに来たんだ」

第14章 塗偽の悪魔

「ジンさん、どうして僕達に呪術を教えたんですか？クライドラゴンだなんてしかも嘘までついて」

「んにゃ、あれは嘘じゃあ無いぞ。オレは元々悪魔だ。オレはクライナー。つまり結界を張る専門系統だったんだ。そいでいい加減結界だけの自分に飽きて来た時、お前の父親に出会ったんだ。瞬時にオレはこの世界に来たばかりのあいつに洗脳を行い、オレを昔からの親友だと思い込ませた。そこにゼイノリックがやって来た。ゼイノリックは直ぐにオレの洗脳を見破り、とある契約を結んだ。オレを魔術師にしてやるからお前の父親とその娘を救え。そしてこの世界を救ってくれと。だがオレには四つの宝石は集め切れなかった。呪術ばかりをしていたオレなんか魔術師に必要な霊気は無いに等しかったからな。だから命からがら逃げ帰る事はなかったが、多少の傷を負っちゃった。そのせいでもう激しい戦いは出来なかった。血友病とか言うのになっちゃったからな」

「血友病は遺伝の問題なのでそんな事じゃかからない筈ですよ」

「タ、タクミ。血友病って何？」

「えっとね……。まあ簡単に言えば一度出血したら血が止まりにくい病気なんだ。例を言えば林檎を噛んで歯茎から血が出たら一ヶ月くらい止まらなかつたり。そして重大な点は女性は血友病にはならないんだ。どうしてか分かるかい？」

「僕に分かるわけないよ」

「んな事は無いんだ。ほら、四年生の時保健体育でやったら、男女の成長の違いを。そこで女性は生理が毎月起こるって言ってただろ？もし女性が血友病だったらそこで出血多量でバタン、キュッ、コロんだ」

「何、その表現」

「この方が解りやすかと思って……」

「んで血友病は治らないの？」

「薬で治るらしいよ。けど前にニュースになったじゃん。アメリカから輸入した血友病の薬にエイズの菌が居て、血友病患者が次々とエイズに掛かっちゃったっていう」

「知らない。とにかく知らないから」

「ま、それはいいとしてジンさんはどうして普通ならない血友病にかかってしまったんですか？」

「オレは血友病にはなっていないぞ？」

「は？」

「血友病のような病気になっちゃっただけ」

「んなっ!？」

「はははは。血友病ったのは解りやすくいっただけさ」

「どこのつまり血友病ではなく、こっちの世界特有の病気にかかってしまった。そして症状は血友病そっくり・・・」

「まあそんなに深く考える必要は無いよ。それより結界の張り方だ」
「確かに初めはそれが条件でしたね」

「ああ。結界はな、副作用が無く張れるんだ」

「そんなのどうして初めに言ってくれなかったんですか？」

「いや・・・ねえ」

「？」

「忘れてたから」

まさかジンさんが忘れてたで終わらすとは・・・。

「そして肝心の張り方なんだが、呪文は要らない。ルーナーと言う葉を煎じた茶を飲めばいいのだ」

「肝心のルーナーの茶は？」

「だから今から取りに行くんだ」

「・・・」

「じゃ、ルーナーはこの屋敷の地下……。最深部にある抜け穴を通って行った所にある嘆きの樹林畑という場所で栽培されている」

「そこにジンさん行って採って来ると・・・？」

「いや、オレは行かない。タクミとライヤの二人で行くんだ勿論この屋敷内に要る間は場所が解るからいいから最深部までの指示を出す。そこから抜け穴までは自分で行くんだ！」

「はぁ。分かりました」

「ちなみに言っとくが・・・この屋敷にはジッパーのような久遠の狭間の奴らがゴロゴロしている。必ずフライパンは肌身離さず持っている事！」

「了解」

そう言って僕達は再び走り出す・・・。

第15章 理想の力

「食堂を出たらまず右に曲がり、そのまま走り抜け。間に敵（久遠の狭間の住人）に出会ったら必ず戦うんだ。逃げようと思ってもあいつらからはまだ逃げられないだろう。戦う方が痛手は軽い。他の指示は追い追いつく」

言われた通り、僕達は食堂を出たらすぐに右に曲がり走っている。今の所何の気配も感じ無いが、僕の感覚は目の前に居る場合が背後を取られて一撃喰らう本の手前位であろう。

「ライヤ、感じるか？」

タクミが走りながら問う。

「感じるって何を？」

「敵の……。殺意」

「ウガァー！」

タクミの声は謎の雄叫びによって掻き消された。

「！？」

「でたぁー！」

「ウガァー！」

ジッパーではない。だが久遠の狭間の住人である事は間違いないだろう。

「逃げるぞ！」

僕は慌てて逃げる。

ガシッ！

嫌な機械音と共に僕の自由を奪われた。

「フレイカヌーゼオ！」

目の前で炎が上がる。その時、僕は敵の容姿を一瞬だけ見たような気がした……。何かを哀れみ、何かを抱え込んでいる。それは今にも崩れ落ちそうな程……。弱々しくて……。

「業火の炎よ炎上せよ、フレイカヌーゼオ！」

再び炎が上がる。

「止めてー！」

僕は叫んだ。ここにある生命を、例え有り得ない物だろうと失いたくなくて……。

「フレイ……。カヌー……ゼオ！」

躊躇しながらもタクミは呪文を唱える。

「……！」

目の前で火花が散る。

――覚醒だ。

頭の中で誰かが言った。

――俺はお前という存在を覚醒させ、よりお前の理想とする力を与える事が出来る。しかし……。覚醒する事が良い方、悪い方どちらに転がるかは分からない……。

――僕の……。理想とする力！？

――抹消をせずに敵を倒す力。だが……。まあ今は言わないでおこう。お前が覚醒をすれば俺はお前の前には最期の時しか現れない。覚醒魂を集めるためにな。

――覚醒魂？

――それは最期にいつてやる。覚醒するのか？

答えは決まっている。

――もちろん……。覚醒を！

――了解。

「……」

ふとタクミが僕の方を見て唾然としているのに気が付いた。

「どうしたの？」

「いや……。上」

タクミが見ていたのは僕の上だったようだ。

「何も無いじゃないか……」

上を見ながら言う。

「気のせいかな。気にしないで！」

「そう・・・？」

「さ、行こう！」

そしてまた走り始める・・・。

第16章 結界の法則

「w e r f y g i j m p o p p @」

久遠の狭間の住人の声……。

僕達を狙う者の声。

「劫火の炎よ炎上せよ、フレイカヌーゼオ！」

タクミの声。

炎上する炎……。

ボクハダレモウシナイタクナイ。

「浄化せよ！」

覚醒後、僕は色々と考えた。

謎の声はこう言ったのだ……。

――呪文は自分で考えろ。

呪術ではないから型を入れる必要はない。

頭の中に思い描いた効果が生まれるのだ……。

そして僕は浄化を選んだ。

全てを無差別に破壊しようとする異界の住人。

しかしそれは住人の残像。それも悪しき心の残像だ……。

それを浄化さえすればこっちの世界に現れる事はない。

キラキラと輝きながら久遠の狭間の住人は崩れていく。

死んだわけではない。

澄んでいつているのだ……。

「ライヤ……？」

「どうしたの？タクミ？」

「今……。お前がやったんじゃないのか？」

「そうだよ」

僕はタクミに全てを話した。

「なるほど、お前はよく分らない奴のよく分らない契約を結んだんだな。悪魔と結ぶ魂の契約のような」

「た、魂の契約って・・・」

「覚醒魂とやらを結局は持っていられるんだろ？」

「ま・・・まあ」

「そんなの善意の行為じゃない。悪魔同然だ」

「う・・・うん」

「なら今度その声が聞こえたら契約を破棄するんだ！分ったな？」

「わ・・・分ったよ」

タクミのは悪いが浄化の力を捨てる気は無い。

「お、階段があるぞ」

「これを下りれば嘆きの樹林畑に・・・」

「多分な・・・」

コツコツコツ・・・。

階段を下りていくと共に後ろから同じペースで誰かが階段を下りてくる音が聞こえる。

「ねえタクミ・・・？」

「シッ！！」

タクミがペースを上げた。

続いて僕も駆け下りる。

「・・・」

一番下に着いた。

そこにはおとぎ話に出てくるような青く澄んだ月。

・・・そしてもう一つ隣に真っ赤な月。

「ようこそ僕の庭へ」

後ろから声がする。

さっきの人物だろうか？

「……」

僕もタクミも恐ろしさのあまり首が回せない。

「僕は君達をよく知ってるんだ」

妙なアヒル声。ヘリウムガスでも吸っているのだろうか……。

「僕は二人居るんだ」

声は一人から。つまりもう片方は喋っていない。

「僕の名前は……」

「黙れ！」

タクミが不意に叫ぶ。

「オレ達はこんな所でウダウダお喋りしているほど暇じゃない。用があるならさっさと見えよ」

「ふっ……。そうか。用件はこうだ……。

二度とスカイリングパレスに近づくな」

「何故だ……？」

「お前達は選ばれた。ゼイノリックによって」

「それは分っている」

「しかしこの世界にはもう既にゼイノリック一族の権力は聞かない。冥界の住人の力もだ」

「プルートの方……」

「そうだ。プルート様、そして申請第七剣豪の力が今はもっとも正義」

「……」

「それに背く者は全て悪だ」
曲がっている。

それとも洗脳。マインドコントロールを受けている。

「分った。オレ達はお前らを倒す」

「そうか……」

タクミは思いつき振り返った。

僕もそれに続く。

「んな・・・!?!」

そこに居たのは僕達の身なりそっくりの人物だった。

「驚いたか・・・さあ、じっくり料理してやるよ」

タクミとタクミの姿をした相手が同時に走り出す。

「『劫火の炎よ炎上せお、フレイカヌーゼオ!』」

お互いが炎上する・・・。

「『漆黒の魔帝を討伐し、ド○クエの如く人に好かれる。そしてカ
ツコイイ正義の勇者。レンジャー!!!!』」

互いに爆発し合う・・・。

自分VS自分・・・。

お互いの攻撃が全く同じ。

これでは決着がつかない。

浄化だって・・・。

いや、あいつは悪しき者。浄化の力は・・・!?!?

「『浄化せよ!』」

やはりあいつも浄化を使った。

『!?!』

「浄化は悪しき者を正す力がある。良き心には力を倍増させる・・・。
・。それが僕の考えた力!」

『そんな』

「レンジャー!!!!!!」

バ~~~~ン!!!!!!

「ライヤ・・・」

「何?」

「す・・・凄いぜ。お前は凄すぎる!」

「へへへ」

サクッ

足元で何かが触れる。

「ん？草？」

「それがルーナーの葉だ！」

「ジンさん！？」

後ろからジンさんが歩み寄る。

「今までの行動は全部見た。強くなったな」

「じゃあ早く結界を」

「ああ」

ゴクリッ……。

苦い味が下をつづり、喉を通る。

すると体に薄い布をかぶった感覚が襲ってきた。

「結界は張れた。これを張っている間はお前達は熱、冷氣、放射能等の全ての物を無効化出来る」

「それって無敵ってことじゃ……」

「ああそうだ」

「ならどんな敵でも」

「攻撃は防げない。それに結界は一分で切れる」

「ええええええ！？」

「ポットに残りの結界液を入れておいた。朱雀戦ではこれを飲み。無くなった場合は……。死を覚悟するんだな」

気がついたらまた僕達はあの分かれ道に居た。

今度は左へ曲がる。

「この先に朱雀が……」

僕達は大きく足を踏み出す……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9751c/>

ジュラノイズ

2010年10月8日15時36分発行